

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 27 日現在

機関番号：25301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2017

課題番号：25463502

研究課題名(和文) 学校と医療の連携による思春期の性に関する子育て支援プログラムの開発と縦断的評価

研究課題名(英文) Development and Longitudinal Evaluation of a Parenting Support Program on Issues Associated with Sex during Puberty Offered in Coordination between Schools and Medical Institutions

研究代表者

岡崎 愉加 (OKAZAKI, YUKA)

岡山県立大学・保健福祉学部・准教授

研究者番号：50224001

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：中学校養護教諭と助産師の2職種間連携を主軸とした「思春期の性に関する子育て支援プログラム」の開発と評価を行った。保護者へのグループインタビューやアンケート調査結果から年4回の座談会と年1回の講演会を開催した。座談会や講演会の参加者からは高い評価を得たが、参加者数が増えないという課題があった。参加できない保護者への支援と、参加者が講演等の内容を他者に伝えやすくすることを目的に、思春期の子育てパンフレットを作成して、全校生徒の保護者に配布した。8割を超える保護者がパンフレットは役立つと評価した。保護者の6割が子どもに、5割が父親または母親にパンフレットを見せたいと思っていた。

研究成果の概要(英文)：We developed and evaluated the usefulness of a “parenting support program on issues associated with sex during puberty” based on the cooperation of two professional groups: junior high school yogo teachers and midwives. Based on the outcomes of group interviews and questionnaires conducted with guardians of children targeted for the program, we organized group discussions four times in a year, with a lecture once a year. Although the participants of the group discussions and the lecture rated the support program quite highly, it was problematic that the number of participants did not increase. With the aim of providing support to guardians who did not participate and making it easier for the participants to share information obtained from the organized lectures and discussions with others, we prepared a pamphlet on “parenting children during puberty” and distributed the same to the guardians of all students. More than 80% guardians affirmed the usefulness of the pamphlet.

研究分野：助産学、母性看護学

キーワード：思春期 子育て支援 家庭 性教育 多職種連携 養護教諭 保護者

1. 研究開始当初の背景

思春期は、第二次性徴が始まり性成熟に向かう重要な時期である。2011年の青少年の性行動調査¹⁾によると、高校生の性交率は2005年に比べて、男子は26.6%から15%へ、女子も30%から23.6%と減少しているが、中学生では、男子3.6%から3.8%に、女子も4.2%から4.8%に若干ではあるが増加している。また、10代の人工妊娠中絶は近年減少傾向にあるが、14歳未満の出産は増加している²⁾。その他にも、性感染症、デートDV³⁾、性犯罪など、思春期の子どもを取り巻く性的問題は顕著化しており、性教育の必要性が高まっている。

性教育は、いのちの尊さを体験的に学び、まず自分を大切に思い、そして相手を思いやる心をもつことが基礎となる。そして、心身の発達段階に応じた教育が必要であることから、性教育における家庭の役割は重要といえる。しかし、親世代は十分な性教育を受けていないものがほとんど⁴⁾で、どのように取り組めば良いか悩む親も多い^{5,6)}ことから、思春期の子どもをもつ親への支援は重要な課題である。また、子どもへの性教育の方法についての研究は多いが、親への支援やその具体的なシステムづくりを目指した研究はほとんどなく、支援プログラムも見当たらなかった。

そこで、家庭と学校と医療が連携して思春期の子どもを育てていく「思春期の性に関する子育て支援システムづくり」が重要と考えた。研究の第1段階として、平成22~24年度までに支援モデルの構成要素として、親が求めている支援⁷⁾、教育者や医療者が行っている支援の内容や考え^{8,9)}を明らかにし、学校と医療の連携により家族機能の向上をめざす思春期の性に関する子育て支援システムの試案として、養護教諭と助産師の2職種間連携を主軸とした支援モデルを考えた。そして、支援策として実施した座談会の評価を行った。参加者のほとんどが講師の話は参考になると思っていたが、得た知識などを子育て中の友人や知人に伝達している者は少なかった。

文献

- 1) 財団法人日本児童教育振興財団内日本性教育協会編、「青少年の性行動」第7回調査報告、東京、2012
- 2) 平岩幹男編、思春期の性的問題をめぐって、診断と治療社、東京、2011
- 3) NPO法人DV防止ながさき、デートDVに関する意識調査、2006
- 4) 齋藤益子、他、思春期における性教育のあり方、思春期学、27(4)、351-360、2009
- 5) 岡崎愉加、他、家庭における性教育の実態、岡山県母性衛生、24、54-55、2007
- 6) 岡崎愉加、家庭における性教育 - 親が難しく感じたことやうまくいかなかったと思うこと、母性衛生、53(3)、181、2012

- 7) 岡崎愉加、家庭における性教育～親が求める支援～、岡山県母性衛生、28、56-57、2012
- 8) 原田さゆり、岡崎愉加、家庭における性教育 - 助産師が必要と考え行っている親への支援 -、母性衛生、53(3)、271、2012
- 9) 岡崎愉加、養護教諭や教諭が行う親への支援と支援についての考え、思春期の子どもに関する発達課題や諸問題に対応できる子育て支援システムの構築研究性報報告書、30-33、2013

2. 研究の目的

思春期の子どもに関する発達課題の達成や、諸問題(妊娠・性感染症・デートDVなど)の予防あるいは対処行動ができるような家族機能の向上をめざし、家庭と学校と医療が連携した子育て支援システムの構築を最終的な目的として2010年から研究を開始した。本研究はその第2段階であり、養護教諭と助産師の2職種間連携を主軸とした支援モデルを用いて、実際に中学校と連携しながら、具体的な子育て支援プログラムを開発し、その効果や課題を明らかにすることが目的である。

まず、研究の第1段階(2010~2012年)で明らかになった座談会内容の保護者間伝達が進まないことについて、伝達を困難にしている要因、伝達を促進する要因、具体的な伝達方法について明らかにすることを目的に研究(1)を実施した。次に、支援プログラムのひとつとして実施した講演会について、今後の課題を明確にすることを目的に研究(2)を行ったが、参加者が少なかった。そこで、講演内容のより詳細な評価を得るため、研究(3)を実施した。

また、連携中学校で行う思春期の性に関する子育て支援の具体策を検討するために、支援プログラムの対象となる保護者の性に関する子育てへの意識を明らかにすることを目的に研究(4)を実施した。

連携中学校での支援プログラムは、これまでの研究を基に養護教諭と相談して7月と12月の個人懇談日を利用した年4回の座談会と9月の夕方~夜の時間帯に年1回の講演会を開催した。座談会は講師が思春期の性に関する情報を提供しながら子育てについて一緒に考えるという内容で、所要時間を60分とした。同じ内容で2回実施したり、男子と女子に分けてみたりしたが、保護者の満足度に大差はなかった。講演会の内容は、思春期の子育てと「性」の関係、思春期の性に関する子育ての実態、思春期の子育てに役立つ性に関する知識、思春期の性に関する子育てポイント、相談できる所や参考になる本・HPの紹介等であり、所要時間を60分とした。講演会や座談会には、何回も繰り返し参加する保護者がいる一方で、参加人数は増えない(講演会10人前後、座談会3~6人程度)という状況があった。参加できない理由として仕事や塾の送迎などの声が聞かれた。そこで、講演会や座談会に参加できない保護者の支援

と、保護者間伝達を促進するために、思春期の性に関する子育て支援パンフレット（内容は講演や座談会で取り上げた内容とほぼ同じ）を作成して連携中学校の全校生徒の保護者と教員に配布した。そして、今後の支援への示唆を得ることを目的とし研究（5）（6）を行った。

3. 研究の方法

（1）思春期の性に関する子育て支援として実施した座談会で得た知識や情報の保護者間における伝達について

平成25年12月～平成26年1月に、中学生の子どもをもつ母親を対象として実施した座談会（思春期の心と体の特徴・性行動の実態・子育てのポイント等の知識や情報を助産師が提供しながら親同士で約60分間自由に話し合う会）に参加した15名（3グループ）を研究参加者として、約60分のグループインタビューを実施した。逐語録を作成し、伝達を困難にしている要因、伝達を促進する要因、具体的な伝達方法について語られている部分に着目して質的帰納的に分析した。

（2）養護教諭と助産師の2職種間連携による思春期の性に関する子育て支援プログラムとして実施した講演会の評価

平成26年9月に連携中学校で開催した講演会「思春期の子育てを考える」の参加者12名を対象に、無記名自記式質問紙調査を実施し、有効回答9名を単純集計した。

（3）思春期の性に関する子育て講演の評価

平成27年2月、思春期の性に関する子育て講演に参加したA市の2中学校区に在住する保護者ら246人に、無記名自記式質問紙調査を実施した。有効回答153人を記述統計の対象とした。

（4）中学生の子どもをもつ親の「思春期の性に関する子育て」への意識

平成27年4月に、連携中学校に入学した生徒の保護者286名を対象とし、無記名自記式質問紙を用いて、親が許せる子どもの性行動の時期・性の諸問題に関する予防教育への考え・思春期の子どもに関して知りたい内容等を調査した。回収された252名のうち、性教育関連の仕事の経験者や記入に不備があるもの等を除いた216名を分析対象とし、単純集計をした。

（5）思春期の性に関する子育て支援プログラムの一環として作成したパンフレットの保護者の評価

平成28年12月、連携中学校の保護者770人に、パンフレットと無記名自記式質問紙を配布した。回収347人の内、不備を除いた334人を分析対象として単純集計した。

（6）思春期の性に関する子育て支援パンフ

レットの中学校教員の評価

平成28年12月、保護者に配布したパンフレットを連携中学校の全教員74人に配布し、平成29年1月に無記名自記式質問紙調査を実施した。回収57人の内、不備を除いた55人を分析対象として単純集計をした。

なお、すべての研究は、岡山県立大学倫理委員会の承認を得て実施した。

4. 研究成果

（1）保護者間の伝達を困難にしている要因は、21コード、6サブカテゴリー、3カテゴリー「日常生活の中で機会がない」「正確に伝える自信がない」「相手の反応が良くない」に集約された。伝達を促進する要因は、23コード、8サブカテゴリー、3カテゴリー「子どもの性に関することについて心配や気になる」「座談会への参加を肯定的にとらえている」「友だちや知り合いに堅苦しくない軽い感じなら言える」に集約された。具体的な伝達方法は、20コード、5サブカテゴリー、2カテゴリー「資料があればよい」「座談会を紹介する方がよい」に集約された。

日常生活の中で保護者同士が話す機会がないことが、伝達を困難にしていた。これは、中学生になると仕事を始める親が増えることや小学生までのような学校行事がなくなり、親同士が会う機会が減るためと考えられる。しかし、子どもの性に関することについて心配や気になることがあれば伝達は促進されることから、正しい情報が伝達されるように母親を支援することが必要である。一方母親は、正確に伝える自信がないため、資料があれば話しやすいと思っていた。また、座談会への参加を肯定的にとらえていると伝達は促進されるが、性に関する話題ということもあり、相手の反応が良くないとそれ以上は話さないと考えられる。そこで、今後は座談会の内容の充実に加えて、参加者が気軽に伝達できる資料の作成・配付が必要と考えられる。

（2）対象者9名の平均年齢は44.9歳、母8名、父1名であった。講演内容は、全員が「良かった」「どちらかといえば良かった」と評価した。特に「月経異常と受診の目安」は100%が、「思春期の性に関する最近の話題」「性的被害の実態」「思春期の子育てポイント」「参考になる本やHPの紹介」は88.9%が良かったと評価した。講演のことを話したい相手は「子ども」66.7%、「子どもの父母」「子育て中の友」44.4%であった。「思春期の子育てに役立つ」55.6%、「配付資料は役立つ」55.6%であった。講演をきっかけに知りたくなったことは「家庭における性教育、子どもへの教え方」77.8%、「学校で行う性教育の内容」66.7%であり、「親が教えることに疑問があったが、親もしっかり知って子どもに伝えるべきだ」という感想があった。今後の

参加希望は「都合が合えば参加したい」が最も多く 66.7%であった。

講演は高評を得たが、参加者は少なかった。参加者を増やすための広報や開催日時の調整が課題である。

(3) 対象者 153 人の平均年齢は 42.5±5.5 歳、母親 94.1%、父親 5.9%であった。最も良かった講演内容は「思春期の子育てポイント」66.7%、次いで「講師の子育て経験談や事例紹介」64.1%、「参考になる本とホームページの紹介」60.1%、「男子への性教育」58.8%であった。内容は「思春期の子育てに役立つと思った」83.7%、「わかりやすかった」54.2%であった。内容のポイントを箇条書きにした配布資料は「役立つと思った」34.0%であった。得た知識や情報を話したい相手は、「子どもの父親(母親)」64.7%、「子ども」52.9%、「子育てをしている友人」35.3%であった。

8 割強の親は講演内容を思春期の子育てに役立つと思っていたが、得た知識や情報を子育て中の友人に話したい親は 3 割強と少なかった。また、配布資料が役立つと思う親も 3 割強と少なかった。以上より、講演内容をわかりやすくまとめたパンフレットがあれば、家庭で使用したり、子育て中の友人に伝えたりできると考えられる。

(4) 対象者 216 名の平均年齢は 41.3±3.8 歳、母親 94.9%、父親 5.1%であった。育てている子どもの性別は、女子のみ 19.4%、男子のみ 19.9%、両方 48.1%であった。親が許せる子どもの性行動の時期として、「手をつなぐ」は中学生 50.5%、高校生 41.2%の順であった。「二人でデート」は高校生 49.5%、中学生 41.2%の順であった。「キス」は高校生 50%、大学生 27.8%の順であったが、中学生から許せる親も 15.7%いた。「愛撫」は大学生 46.3%、高校生 24.1%の順であった。「避妊をした性交」は大学生 44.4%、20 歳 22.2%の順であったが、高校生から許せる親も 14.4%いた。「避妊をしない性交」は結婚 68.5%、社会人 16.2%の順であった。性に関する問題の予防教育では、子どもが聞いてきたら教えるが最も多く 85.2%、次いで、親には教える責任がある 82.9%、親がわかる範囲は積極的に教える 63.9%、学校や専門家に任せたい 40.3%、親が教える必要性を感じない 2.3%であった。思春期の子どもに関して知りたい内容は、思春期の性行動の現状 60.6%が最も多く、次いで、思春期の性の悩み 56%、性教育の現状 49.1%、男子の心の変化 44.4%、性犯罪被害の現状 39.8%、女子の心の変化 36.6%であった。性に関する知識で知りたい内容は、子宮頸癌 38%が最も多く、次いで、性感染症 37.5%、射精 32.4%であった。思春期の性に関する子育て支援への希望は、子どもへの教え方を教えて欲しいが最も多く 84.7%、次いで、学校で行う性教育の内容を

教えて欲しい 75.9%、何かあった時に相談できる所の紹介 72.2%、気軽に相談できる支援が欲しい 63.4%、性に関する知識を保護者に教えて欲しい 62.5%であった。

親は、避妊は意識するが、性感染症やリベンジポルノなどのトラブルに巻き込まれる危険性には考えが及んでいない可能性がある。支援策として、妊娠以外の思春期の性の問題や SNS による思春期の性に関する問題の現状を伝える必要があると考えられる。性の諸問題に関する予防教育について、8 割程度が親には教える責任があると思っていたが、4 割の親は学校や専門家に任せたいと思っていた。また、子どもへの教え方を教えて欲しい親が 8 割を超えていた。親が知りたいと思っていた「思春期の性行動の現状」、「思春期の性の悩み」、「性教育の現状」、「子宮頸癌」、「性感染症」等の知識を提供すること、また、子どもへの教え方について提案し、親が各家庭の特徴に合わせた子どもへの関わりができるような支援が必要と考える。

(5) 対象者 334 人の平均年齢は 43±4.8 歳、母親 96.1%、父親 3%、祖母 0.9%であった。パンフレットをすべて読んだ 18.6%、大体読んだ 43.1%、気になるところだけ読んだ 13.2%、パラパラ見た 24.3%、読まなかった 0.9%であった。良いと評価された内容は、思春期の性に関する子育てポイント 47.6%、相談できるところの紹介 46.4%、思春期の子育てに役立つ知識：避妊 43.4%の順に多かった。どちらかと言えばよいは、思春期の子育てに役立つ知識：性行動の現状と悩み 51.8%、思春期の性に関する子育ての実態 48.8%、思春期の子育てに役立つ知識：LGBT47.3%の順に多かった。パンフレットを見せたい人は、子ども 62.3%、子どもの父親または母親 52.4%、子育てをしている友人 19.8%の順であった。パンフレットは思春期の子育てに、とても役立つ 31.7%、まあ役立つ 55.1%、どちらとも言えない 12.3%であり、役立たないはいなかった。もっと詳しく知りたいと思った内容は、家庭での子どもへの教え方(対応の仕方)41.6%、思春期男子のこころの特徴 32.6%、思春期女子のこころの特徴 27.8%の順であった。

パンフレット配布の目的は、講演会や座談会に参加できなかった保護者への支援と参加した保護者がその内容を思春期の子育て中の人に伝えやすくするためであり、効果は得られていると考える。保護者向けに作成しているが、子どもに見せたいという希望が多かったため、今後は子どもに見せることも意識して改訂したい。

(6) 対象者 55 人の平均年齢は 41.1 歳、女性 56.4%・男性 43.6%、子どもあり 52.7%、性教育に関わった経験あり 63.6%であった。良いと評価された内容は、思春期の性に関する子育てポイントと相談できるところの紹

介が同率で 52.7%、リベンジポルノが 47.3%であった。どちらかと言えば良いは、思春期の子育てと「性」の関係、思春期の性に関する子育ての実態、性行動の現状と悩み、デートDVが同率で 38.2%であった。パンフレットは思春期の子育てに、とても役立つ 43.6%、まあ役立つ 45.5%であった。専門家から保護者に知らせて欲しいと思う内容は、家庭での子どもへの教え方(対応の仕方) 54.5%、子どもを取り巻く性情報 45.5%、何かあったときに相談できるところ 43.6%であった。

内容で最も高い評価を得た「思春期の性に関する子育てポイント」と「相談できるところの紹介」は保護者の評価と同様であった。また、保護者が最も詳しく知りたいと思っていた「家庭での子どもへの教え方(対応の仕方)」は、教員も専門家から保護者に最も知らせて欲しい内容であった。以上より、「思春期の性に関する子育てポイント」として「家庭での子どもへの教え方(対応の仕方)」についての内容をより詳しくすること、「相談できるところの紹介」など困ったときに活用できるようなパンフレットの改訂が必要であることが示唆された。

(7) 支援プログラムの提案と今後の課題

これまでの研究成果から、養護教諭と助産師の2職種間連携を主軸とした思春期の性に関する子育て支援プログラムとして、PTA保健委員と連携した講演会の実施、情報交換や詳細な知識を求める保護者に座談会の実施、思春期の子育てパンフレットの作成と活用を提案する。プログラムの実施にあたっては、保護者が参加しやすい日時を十分に検討すること、支援内容は特に「思春期の性に関する子育てポイント」「家庭での子どもへの教え方(対応の仕方)」についてより詳しくすることが必要である。また、パンフレットは保護者が子どもに見せることを意識して作成する必要がある。

今後の課題は、連携中学校の所在する市において、養護教諭部会との連携により地域としての取り組みに発展させること、子育ての負担が大きいひとり親家庭に対応できる支援プログラムの開発が必要であると考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表](計 11 件)

岡崎愉加、思春期の性に関する子育て支援として実施した座談会で得た知識や情報の保護者間における伝達について、第 34 回日本看護科学学会総会・学術集会、日本看護科学学会、2014.11.29、名古屋市
岡崎愉加、原田さゆり、濱崎美沙、中学校に入学した子をもつ親が家庭で実施した性教育の内容と性に関する子育てで困ること、第 56 回日本母性衛生学会総会・学術集会、日本母性衛生学会、2015.10.17、

盛岡市

岡崎愉加、中学生の子どもをもつ親の「思春期の性に関する子育て」への意識、第 32 回岡山県母性衛生学会総会並びに学術集会、岡山県母性衛生学会、2015.10.24、岡山市

岡崎愉加、富岡淑子、養護教諭と助産師の2職種間連携による思春期の性に関する子育て支援プログラムとして実施した講演会の評価、日本学校保健学会第 62 回学術大会、日本学校保健学会、2015.11.28、岡山市

Yuka Okazaki、The Support Needs of Mothers Regarding Sexual Matters associated with Puberty: A Comparison Based on the Gender of the Child、19th EAFONS、2016.3.14、Japan・Chiba

岡崎愉加、思春期の性に関する子育て講演会に参加した親の講演会後の思い、第 30 回日本助産学会学術集会、日本助産学会学術集会、2016.3.19、京都市

岡崎愉加、思春期の性に関する子育て講演の評価、第 57 回日本母性衛生学会総会・学術集会、日本母性衛生学会、2016.10.14、東京品川

岡崎愉加、鷺田ちづる、養護教諭と助産師の2職種間連携を主軸とした思春期の性に関する子育て支援の取り組み、第回全国性感育研究大会、2017.8.22、岡山市
岡崎愉加、思春期の性に関する子育て支援プログラムの一環として作成したパンフレットの保護者の評価、第 36 回日本思春期学会学術総会、日本思春期学会、2017.8.27、宮崎市

岡崎愉加、思春期の性に関する子育て支援パンフレットの中学校教員の評価、第 32 回日本助産学会学術集会、日本助産学会、2018.3.4、横浜市

[その他]

岡崎愉加、思春期の性に関する子育て支援～親が性教育を実施していない理由～、第44回日本看護学会論文集 母性看護、査読有、66-68、2014

岡崎愉加、思春期の子育て 知っておくと安心な知識と子育てのポイント、2016

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岡崎 愉加 (OKAZAKI YUKA)
岡山県立大学・保健福祉学部・准教授
研究者番号：50224001

(2) 研究協力者

富岡淑子 (TOMIOKA YOSHIKO)
矢野ちづる (YANO CHIZURU)